



A-05 感染性呼吸器疾患

はいのうよう

肺膿瘍

肺膿瘍は、肺が炎症を起こして肺組織の構造が破壊されて空洞をつくり、そこに膿（うみ）がたまった状態です。大酒飲み、糖尿病、誤嚥を繰り返す人、免疫が低下している人に起こることが多く、肺化膿症（はいかのうしょう）と呼ばれることもあります。

この病気は、口の中のものを誤って肺に吸い込んだり、肺炎が重症化、慢性化した場合に起こります。また、肺癌の手術後や、歯科での治療や歯ぐきの炎症の後に引き続いて起こります。原因菌としては、嫌気性菌（けんきせいきん）、黄色ブドウ球菌、緑膿菌（りょくのうきん）、大腸菌（だいちょうきん）、クレブシエラ等があります。また、肺以外の部分に発生した膿瘍（のうよう）から血流に乗って肺に到達（血行性感染）すること、尿路、

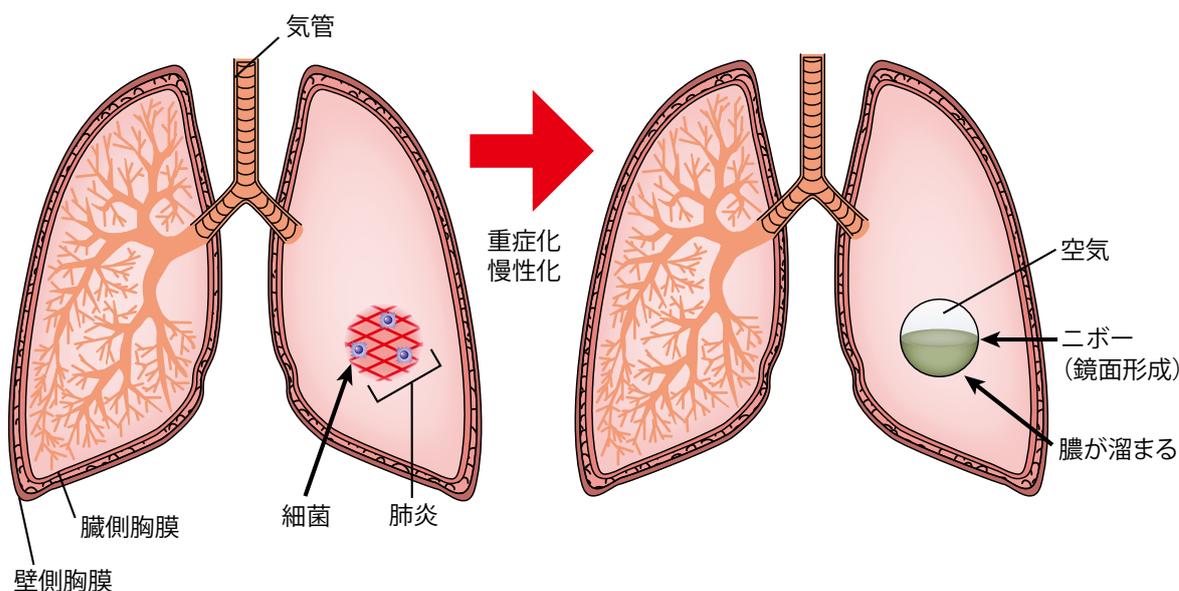
胆道等の感染や、皮膚や心内膜炎（しんないまくえん）等の感染から血液を介して肺に到達することもあります。

肺膿瘍になると、寒気を伴う高熱、せき、たん（血が混じるたん、黄～緑色のたん、嫌な臭いのたん）がみられます。病変が胸膜（きょうまく）に達した場合は胸の痛みがあります。さらに進行した場合には、体重が減少したり、呼吸が苦しくなったり、意識が悪くなることもあります。

検査では、血液中の白血球の増加や炎症反応の増加を認めます。たんの検査ではその中に原因となる菌を認めます。胸部エックス線画像や胸部CT検査では、肺の中に空洞病変と、空洞の中にニボーと呼ばれる水平（鏡面）形成像がみられます。

肺膿瘍の治療は、複数の菌が原因となることが

肺膿瘍（はいのうよう）



多いことから、原因の菌に対して有効な抗菌薬を組み合わせる治療を行います。なかなか治らない場合や、膿が大量にたまっている場合、膿胸にまで進んだ場合は、胸から管を入れて膿を体外に出したり、外科で手術が必要となることもあります。通常の肺炎と比較して長期(数か月)の治療が必

要となります。

肺膿瘍の予防法としては、口腔ケアや虫歯の治療が重要です。また、長引くせきや発熱、胸の痛みが出てきた場合、呼吸器専門医のいる病院を受診し、相談する必要があります。

MEMO

日本呼吸器学会では学会ホームページにて「市民のみなさま向け」に様々なコンテンツを公開しています。ぜひご覧ください！



呼吸器の病気
Respiratory disease
『疾患別』に症状や、診断・治療方法を解説しています。



呼吸器
Q&A
『症状から』対応方法などをQ&A形式でお答えします。

※ここに書かれている内容は、あくまで一般的なものであり、必ずしも貴方の病気にあてはまらない事もありますので、この内容を参考にし、呼吸器の専門医の診察を受けてください。

日本呼吸器学会
ホームページ www.jrs.or.jp/